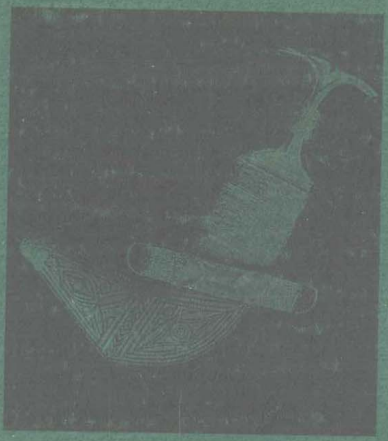
オマーンが見えてくる



Oman Today

The Arab Nation Closest to Japan

by Haruo Endo

オマーンが見えてくる

日本に一番近いアラブの国

中東研究家／前オマーン商工省顧問

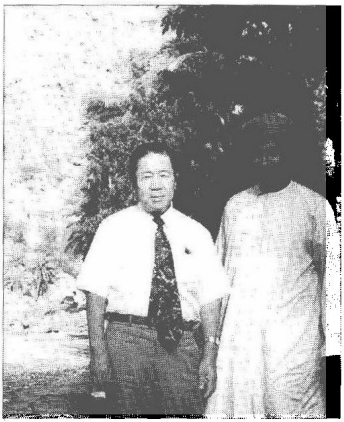
遠藤晴男著

Oman Today

The Arab Nation Closest to Japan

by Haruo Endo

「街」



Haruo Endo

オマーンが見えてくる

遠藤晴男著

© Haruo Endo
THE SIMUL PRESS, INC. 無断転載複写を禁ず

(発行所) 株式会社 サイマル出版会

編集・発行人 田村勝夫
東京都港区赤坂1-8-10 (〒107)
電話(03)3582-4221(代)／FAX(03)3582-4220
振替・00140-9-52090番
印刷・製本 図書印刷株式会社 Printed in Japan

1995年10月 ISBN4-377-41057-1

オマーンに魅せられて——まえがき

私がオマーンを初めて訪れたのは、一九七四年四月下旬のことであった。東京から香港、バハレーンを経由しての長旅、たしかバハレーンに一泊した記憶があるので二日がかりであったと思う。当時、丸善石油に勤務していた私は、オマーンでの製油所建設の調査のために訪れたのだが、オマーンは日本にはまだなじみの薄い国だった。

イギリスで教育を受けたカブース皇太子が、宮廷クーデターで父親のサイード国王に代わって即位したのは、一九七〇年七月。私が訪ねたころは、それまで三八年間の鎖国を解いて、外国に対して注意深く門戸を開きはじめたばかりであった。南部のドファール地方では六〇年代のなかばからの反乱がまだ続いており、国内的にも、国の先行きにはまだ不透明感が残っていた。

当時、外国人の宿泊できるホテルは現アル・ファラジュ・ホテルの旧館のみであったが、われわれ一行が着くと、予約してあったにもかかわらず、満員のため他のホテルに移るようにいわれた。世話人の開発省の役人に案内され、真夜中に星を仰ぎながら岩山を越えて、外国人は通常泊まらない小さなホテルに移った。いまも忘れられない光景である。

*

私が中東とかかわるようになったのは、日本で「中東元年」ともいわれる一九七三年からである。当時四〇歳そこそこの私は、はずかしながら、飛行機に乗ったこともなければ、ましてや外国など行ったこともなかった。多少英語に縁のあった大学を出ていたが、会社に入ってからは国内の仕事が多く、機内の英語のアナウンスの半分も聞き取れないありさまだった。同年三月、イランとの合弁輸出製油所建設プロジェクトのためにテヘランに長期出張、これが私が中東とかかわった最初である。

その年の一〇月の第一次石油危機勃発後、日本の石油会社や商社はいっせいに、当時の中東の中心地ベイルートに進出した。そうしたなかで、私も七四年五月からベイルートをベースに、石油を求めて中東の各産油国を駆け回ることとなった。丸善石油中東事務所長として、七五年一月と五月に、日本で最初のクウェートとの液化ガスと原油のDD契約（産油国政府からの直接購入契約。それまで日本は、いわゆる欧米のメジャー石油会社経由の購入のみであった）の締結にかかわったことは、幸せであった。

ベイルートをベースに、出張するところはすべて産油国。つまり、イラン、イラク、クウェート、バハレーン、サウジアラビア、カタール、アラブ首長国連邦（UAE）、リビアなどであった。

当時のオマーンは、六二年に石油が発見され六七年から石油の輸出が始まっていた。しかし、その

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生産量は約三〇万バーレル／日と少なく、また国の先行きの不透明感とあいまって、その後しばらくは訪れることもなかった。

私が、二回目にオマーンを訪れたのは八五年四月。丸善石油を依願退職し、隣国のUAEでの事業開発を図るアブダビ興産に転職していた私は、オマーンでのビジネス・チャンス発掘のために、アブダビ支店長とともに訪れたのであった。当時のマスカットは、町中が工事現場という感じ。町中に白い砂ぼこりが立ち、トラックが走り回っていた。その年の暮れに、マスカットで初めてのGCC（湾岸協力会議）サミットが開かれることになっていた。それに間に合わせるべく建設中のアル・ブスタン・パレスホテルの姿も、まだ脳裏に焼きついている。コンクリートがむき出しになったまま、谷間にひっそりと静まりかえっていた。

オマーンでの事業展開を見送って、私は引き続きUAEでの仕事を東京で統括していた。その後、三たびオマーンに行き、しかも住むことになろうとは思いもしなかった。定年後もう一度中東の現場に戻りたいと願っていた私は、アブダビ興産を退職後にJICA（国際協力事業団）専門家として、オマーン商工省で働くこととなった。マスカットに赴任したのは、九二年一月九日のことであった。

朝一〇時三〇分発のタイ航空で成田を飛びたって、マスカットに着いたのが午後一一時。迎えの車でアル・ファラジュ・ホテルまで高速道路を走る。オレンジ色の街灯に彩られ、シンガポールとみまがうばかりの清潔さであった。立派すぎて、かえって淋しい感じもした。

翌日、ホテルの六階のベランダからルイの町を見わたした。青い空と、岩肌をむき出しにした異様な形の山なみを背景に、二階建ての住宅がひしめき、その先に高層ビルが立ちならんでいた。私が最初にオマーンを訪れた時には、ルイの町は大半が航空機の滑走路であった。たいへんな変わりようで

ある。その後三年間、妻と一緒にマスカットに住んだ。

*

赴任するまで、オマーンについての予備知識がないわけではなかった。

一九二四年に地理学者の志賀重昂がこの地を訪れた。その縁で、現カブース国王の祖父にあたるタイムール国王が退位後、神戸に居住し、日本女性と結婚。その間にできたブサイナ姫がオマーン王宮内でいまも健在である。

日本の潜水艦が第二次世界大戦の時に、マスカット港で貨物船を撃沈した。

七〇年に即位した名君カブース国王の指導の下に、奇跡ともいわれる発展をとげている。

――こうしたことは知っていた。また、石油についても、オマーンは日本にとって量的には五番目の石油供給国であり、百隻もの船舶が毎日往復するホルムズ海峡を守っている国であるとも承知していた。

しかし、住んでみたオマーンは、思っていた以上によい国であった。驚きでさえあった。オマーンは、「清潔な国」「インターナショナルな国」「女性が活躍している国」「日本とのつながりに熱心な国」「景色のよい国」「歴史のある国」「香水・花を愛する国」「環境・文化の保存に熱心な国」であり、なによりも「名君をいただく国」であった。このなかでも、オマーンの最高のメリットは、オマーン人の人柄のよさだった。

オマーンに住んだ、または一度オマーンを訪ねた人はみな、好感を持ってオマーンを去っていく。こんな国は珍しい。あまり目立たないが、よい国なのである。

日本は経済万能主義で、ややもすれば石油だけで湾岸諸国をみるきらいがある。しかし、あまりに

も一面的な見方である。オマーンについても少し掘り下げてみると、政治面では「国王のミート・ザ・ピープル」行脚、諮問議会、政治的リーダーシップ、外交面では平和主義の外交、経済的にも石油供給のみではなく今後の発展の可能性、文化的な活動、社会生活、男女や家族のあり方、価値観などで、私たち日本人もいろいろ教えられるものが多い。

私は在住していて、オマーンの人たちから日本への熱い思いをきくたびに、「オマーンは日本に一番近いアラブの国」だが、「日本に一番知られていない国」である、と残念に思った。そして、こういうよい国があることを、なんとか日本の方がたに知ってもらいたいと願うようになった。

オマーンを知っていただくのにどういう形がよいのかわからず、私なりの方法として、九四年の一年間、私が見聞したオマーンの出来事を忠実に追い、それに私の体験を書き加えてみた。つまり、私と一緒にオマーンの一年間を体験してもらうのはどうか、と考えたのである。オマーンを含むイスラム諸国では太陽暦ではなく、月の運行にもとづく太陰暦を採用している。両者の関係は本文に詳しいが、本書では西暦にしたがって各月を各章として記述した。

また各章の末尾に、折りをみて書きためた「オマーンの面白い話」（コラム）を一話ずつ紹介した。息抜きに読んでいただきたい。この本が「日本に一番近いアラブの国」オマーンを知る上での一助となれば、望外の幸せである。

*

本書は基本的には、オマーンで発行されている英字紙 *Oman Daily Observer* をベースとしている。それ以外は、オマーン情報省発刊の『オマーン'94』（オマーン広報センターから邦訳あり）、オマーン開発省発刊の *Yearly Statistical Book*, オマーン王立警察発刊の *Foreign Trade Statistics*, 在オマ

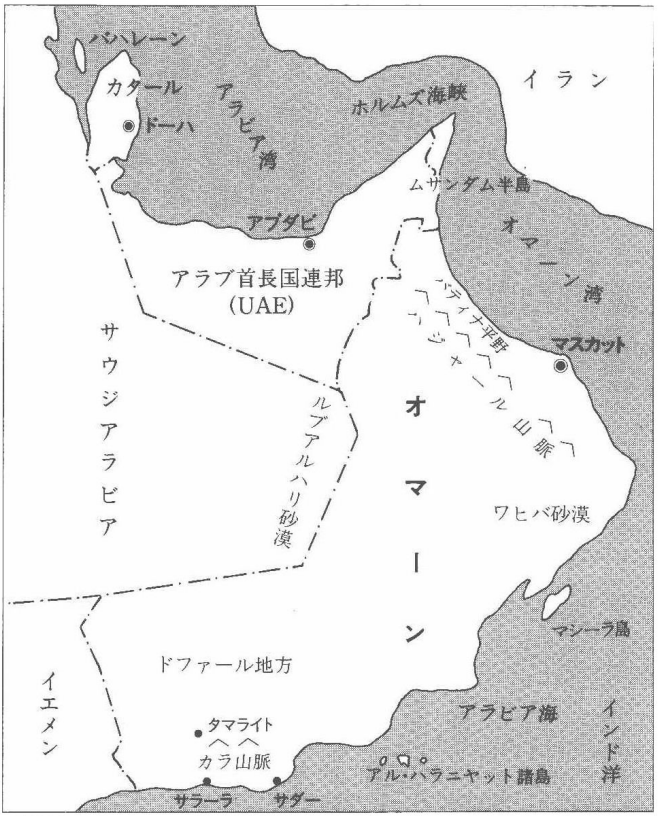
ーン日本大使館の各種パンフレットなどを参考とした。私の滞在中につきあっていただいた中東の「戦友」の皆さんからも、いろいろ教えていただいた。とくに、塙治夫前駐オマーン日本大使、小山茂樹前中東経済研究所理事長からは貴重な助言を得た。

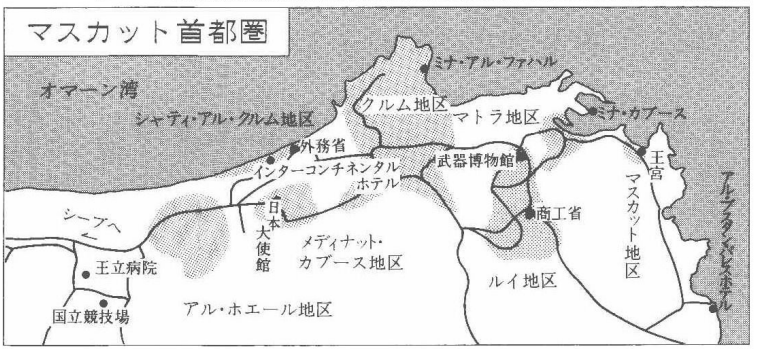
この本の出版は、国際理解の増進をめざして創造的な出版事業を展開されてきたサイマル出版会の田村勝夫社長の格別のご厚意により、実現することができた。心から感謝したい。また、同社の生田栄子専務、編集部の赤羽高樹氏はじめスタッフにもお世話になった。

（一九九五年九月）

遠藤　晴男

オマーン Sultanate of Oman





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

オマーンが見えてくる

オマーンに魅せられて——まえがき

1 ミート・ザ・ピープル——国王の行脚 …… 1
アラブ回春法——コラム …… 20

2 ラマダン——断食の日々 …… 23
三種の神器——コラム …… 42

3 イード休み——断食明けを祝う …… 47
まず挨拶ありき——コラム …… 64

4 平和外交——イエメン内紛の調停 …… 69
写真家ハミース——コラム …… 85

5 ハッジ——メッカ巡礼を送る …… 89
人の死——コラム …… 106

6 イエメン内戦——猛暑のなかで …… 109

替え歌はいかが——コラム……121
7 オマーン・ルネッサンス——近代化の原点……127
一ダース兄弟——コラム……137
8 マジュリス民主主義——諮問議会選挙……141
髭をたくわえるなら——コラム……156
9 オマーン人化——自立に向けて……159
神童たち——コラム……174
10 海亀の産卵——アドベンチャーの魅力……177
アラブを二倍楽しむ法——コラム……196
11 ようこそ皇太子殿下——日本への親近感……199
骨肉の争い——コラム……218
12 オマーンへの期待——新たなる出発……221
砂漠にて——コラム……246

1

ミート・ザ・ピープル
―国王の行脚

OMAN DAILY
Observer

Sabato's bombshell predictions — page 7

Sunday 9 January, 1994

100 Baiza

and advisers who accompanied His Majesty Sultan Qaboos on the first day of his tour of the wilayats yesterday. — *Picture by Mohammed Mustafa*

HIS Majesty Sultan Qaboos begins at Sur's yesterday his annual tour of the wilayats. ☐ Another picture, page 2.

His Majesty's Meet the People tour begins

Royal vehicle showered with flowers

SUR — His Majesty Sultan Qaboos began his annual tour of wilayats yesterday when he set out towards the Batinah region from Sur's Palace.

The people of Sur lined the route to see him off and showered their Sultan, while others performed traditional dances and sang patriotic songs in honour of the visit. Majid al Ma'ruqi, Minister of Palace Office Affairs and Head of the Office of the Supreme Consultative Advisor, Said bin Ahmed al Shanfari, Minister of Petroleum and Minerals, Yahya bin Mahfoudh al Busaidi, Minister of State and Governor of Muscat, Salim bin Abdullah al Ghazali, Minister of Commerce and Fisheries, Seyyid Manahir bin Ali al Busaidi, Minister of State and Governor of Dhofar, Ahmed bin Abdulaziz Maki, Minister of Civil Service, and Dr Ali bin Mohammed bin Moosa, Minister of Health.

The royal motorcade passed through the wilayats enable citizens to participate more actively in the political process, through face-to-face dialogue with the national leadership. This dialogue also gives people a clearer understanding of their roles in the development programme.

「国王のミート・ザ・ピープル行脚はじまる」

元旦は休日ではない

●1月1日（土）――一九九四年元旦、午前六時半。オマーンの首都マスカットの自宅。食卓にはいつものように牛乳とパンとハムエッグが並ぶ。食事だけではなく、役所への出勤もいつもどおり。

当地ではイスラム暦が用いられているので元旦は休日にならない。頭ではわかっているのだが、日本人の私にはなんとなく割りきれない。

私は以前、アラブ首長国連邦（UAE）の首都アブダビで国営石油会社（ADNOC）と合弁の石油会社で働いていたことがあるが、アラブと合弁の会社でも元旦は休みだった。その頃、アブダビ政府の規制が比較的ゆるかった日本系石油会社の現地所長が、「身も心も清めて新しい年を迎えるのが日本人の習慣。そのためには正月休みが一日だけでは短すぎる。どうしても三日間の休みは必要である」といってアブダビ側に談判し、成功したことがあった。その会社も翌年からは結局われわれ合弁会社と同じく一日の休日しか認めてもらえなくなったが、「正月に身も心も清める」には、たとえ一日でも休みが要る。

しかし、ここはオマーン。UAE、バハレーン、クウェートなどとは違い、元旦も休日ではない。

したがって、「日本では休日なのに」とぐちをいっても始まらず、今日も七時一〇分にはいつもどおり家を出なければならないのだ。

妻と食事をしながら当地の英字新聞 *Oman Daily Observer* に目を通す。一面の右側トップに「一九九三年の主な政治の動き」が掲載されている。左側の囲み記事欄には、「カブース国王が本日午後二時開催の競馬レースにメインゲストとして出席する。これには王族、大臣、次官、各国大使も出席する」とある。

「本日はオマーン文化遺産年の始まりの日である。国王が昨年一一月の建国記念日に九四年をオマーン文化遺産の年と定めた。また、国王はニズワを文化遺産の町と名づけ、今年の建国記念祝典はニズワで行なうと決定した」と報じている以外に、新年に関する記事は何もない。

隣国UAEのドバイ発行の英字紙 *Khaleej Times* に目を通す。やはり新年を祝う記事はどこにもないようだ。大きな太陽の写真がある。「これはなんだ。初日の出の写真ではないか」と期待して記事を読むと、一二月三一日の沈みゆく太陽とある。アラブでは新年より年の終わりに興味があるのだろうか。

物心がついてこのかた、元日に休まなかったことは一回もないのに、元日から通常勤務と考えると足が重い。去年は一月一日がたまたま金曜日で休日となってよかったのにと、気持ちがすっきりしない。

役所に七時半に出勤。カウンターパートのアハメッド部長もサレムもマラックもみな「ア・ハッピー・ニューイヤー」と、われわれ日本人に合わせて新年の挨拶をしてくれるが、家では今日はなんのお祝いもしないとのことだ。当然といえば当然のことだが、それがまたわびしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com